平成**２８**年度　香中研研究主題

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 香中研研究部

１　研究主題(平成24年度より継続)

**教職員一人一人の資質能力と意欲の向上を図り、学校の教育力を高める研究会活動**

（キーワード）　継承・改善　　研究体制　　授業力　　資質能力

２　研究主題設定の理由

本会は昭和36年に発足し、県教育委員会や市町教育委員会の指導・助言、支援を受けながら、また連携を図りながら本県の中学校教育の振興に大きく寄与してきた。本会を今後さらに充実・発展させるためには、次の３点の課題を解決する必要がある。

1. 現在、教員の高齢化と大量退職に伴い、学校現場において、ベテラン教員の専門的な知識やスキルの伝承が課題とされている。また、各支部・部会における実質的な担い手が学校においても主要な役職にあるなど高齢化が問題となっている。今後、スムーズな世代交代を図り、研究方法や組織運営のスキル等を次の時代を担っていく若手教職員に確実に伝えていく必要がある。（継承・改善）
2. 研究会離れの傾向は今に始まったことではないが、学校現場の多忙化や、各支部の研究会において、研究授業者や実践発表者等の決定に苦労することも珍しくない。各教職員が進んで実践発表を行うなどの姿勢は、引いてはそのことが学校の活性化にもつながるものである。今後、各学校において、教職員の研究会活動への積極的な参加を促すなど、研究会の役割と意義の自覚が求められる。各支部・部会における研究活動の成果や課題を教職員自らの実践としてさらに反映されるとともに、今後は、各学校において成果や課題を共有し合う場を設定するなど、香中研の研究活動を学校の教育活動に生かす研究体制の更なる充実を図る必要がある。（研究体制）
3. 「授業が変われば、生徒が変わる」と言われるように、時代が変化しても授業力の向上は必要不可欠である。香中研として、授業力の研究を中心に教師の資質能力に着目した研究を行う必要がある。県教育センターの平成27年度全国学力・学習状況調査の結果分析によれば、小・中学校とも「自尊意識等」「学習意欲」「言語活動」に課題がある。特に中学校において、学校質問紙の結果、授業では「話し合う活動」「課題を設定し解決する活動」を行っているが、生徒は「自分の考えをしっかり伝える」「相手の話を最後まで聞く」に課題がある。このことからすべての教科・教科外において、「分かりやすく文章に書かせる指導」「資料を使って発表が出来るための指導」「発言や活動の時間を確保した授業」等の課題を解決するために、アクティブ・ラーニングで言語活動等を充実させ、思考力・判断力・表現力等の育成を図る必要がある。（授業力）

こうした現状と課題から、学習指導要領の完全実施となる平成24年度からの香中研の研究主題を、教職員の資質能力の向上や学校の教育力の向上とするなど、これまでの生徒像を改め、個々の教師像や学校像とすることで、香中研の自主研究団体としての性格をより明確に打ち出し、加入する全教職員、全中学校に研究会の一員であることや役割の自覚を促し、研究会活動の活性化を図りたい。（資質能力）

３　今後の研究推進について

　本会が目的とするところは、生徒に生きる力を育てるために一人一人の教職員が、各支部・部会での研修等の活動を行うことで、個として高めた意欲や知識・技能が学校現場に反映され、学校が組織として機能する力として高められることである。したがって、本研究主題は、研究会活動とそれを生かす学校教育の在り方も視野に入れたものである。そこで、次の点に重点を置きながら、各支部・部会で計画的に実践していくこととする。

　・　研究の継続性を図るため、本研究主題を平成29年度まで継続する。

　・　これまで各支部・部会で研究実践してきた指導法の研究を継続、発展させながら、ベテラン教職員から若手教職員への指導法等の継承を図る。

　・　継承の視点で見直した各支部・部会の研究体制の基、授業に関する実践的研究等を組織的に行い、改善の視点から研究の成果と課題を明確にする。

**香中研研究主題を具現化するための留意点について**

香中研の現状と課題は以下の通りである。

　○　大量退職・採用による世代交代への対応

　○　研究会活動への積極的な参加と役割・意義の自覚

　○　研究会活動を学校の教育活動に生かすための研究体制づくり

　○　授業力の向上、特に言語活動等の充実による思考力・判断力・表現力の育成

　香中研ではこの現状や課題をふまえ、研究主題を「教職員一人一人の資質能力と意欲の向上を図り、学校の教育力を高める研究会活動」として平成24年度から各支部・部会で取り組むこととした。　その際、次の点に留意していただきたい。

①　次の視点などから、各支部・部会特有の現状と課題を明らかにする。例えば、

　・　意図する生徒を育成する視点から、どのような教職員の資質能力や意欲が課題になっているのか。

　・　継承・改善の視点から、どのような教職員の資質能力や意欲が課題になっているのか。

　・　これまでの研究の経緯から、どのような教職員の資質能力や意欲が課題になっているのか。

②　できるだけ資質能力や意欲に焦点をあてた研究にする。例えば、

　・　どのような資質能力や意欲に焦点をあてた研究なのかがわかるような研究主題にする。

1. 研究のねらいを明確にして、計画的に取り組む。例えば、

　・　研究期間を３年毎の２サイクルで考える。特に研究期間(３年)で何をどこまで明らかにしようとしているのか、本研究の予想される結果等研究目的を明確にして研究に取り組み、その成果と　課題を研究大会で示す。残された課題については、さらに３年間の継続研究とする。

④　本研究は、教職員一人一人の資質能力や意欲が向上し、学校の教育力が高まることを意図しているので、個人研究ではなく、実証的かつ組織的な共同研究として行う。例えば、

　・　「授業が変われば、生徒が変わる」と言われるように、授業研究を中心に意図した教師の資質能力に着目した研究を行う。

　・　これまでの研究体制を見直し、教職員の資質能力や意欲が高まる研究体制にする。

　・　意図した教職員の資質能力がどのように高まったかどうかについての評価研究を行う。

・　県全体の研究活動の動向を見極めるため、全国学力・学習状況調査の学校質問紙調査結果等を継続的に分析する。